

ぼくが乗り越えたかべ

小五

ぼくは、三年生の夏休みからアメリカに行くことになった。父の転きんに合わせて家族全員が引っ越すことになったからだ。

実は、ぼくは、三年生の春に東京から埼玉に引っ越してきたばかりだ。正直、「またか、やっと友達ができたのに。」と思った。しかも、今回は、アメリカに行くのだ。周りの人たちは、きっと見た目も日本人とは全然違うだろうし、もちろん言葉も通じないだろう。心の底から「無理だ、いやだ。」と思った。アメリカに着いて一週間後、ぼくは、

現地の小学校に行くことになった。初めて校舎を見たとき、大きくてりっぱでどろいた。

教室に入って、先生がぼくのしょうかいをしてくれたけれど、ぼくは何を言っているのかさっぱり分からなかった。クラス友達も、全く興味がないのか、誰も話しかけてこなくて、ぼくは、とてもさみしかった。自分の英語の名前のプレートを見て、日本にもどりたいと思った。その日一日、「早く終わらないか。」とばかり考えていた。

数日後、男の子と女の子が話しかけてくれた。

「君は、日本人なの。」

「そうだよ。よろしくね。」

これをきっかけにぼくは、少しずつ友達が増えて学校が楽しくなった。男の子の

Aさんが、昼休みや放課後にサッカーや鬼ごっこにさそってくれたので、ぼくの気持ちはだんだん明るくなっていった。Aさんのおかげで、みんなとも仲よく遊べるようになった。女の子のBさんは、ぼくの気持ちをみんなに伝えてくれる。つうやくのようなそんざいになってくれた。Bさんのおかげで、勉強や宿題ができるようになった。二人のおかげで、ぼくのアメリカでの学校生活が充実したのだ。

はじめは、ぼくに全く興味がなさそうに見えた友達も、話しかけてくれたり、遊びにさそってくれたりして、日本の学校と同じくらい楽しくなった。

ぼくのクラスには、金ぱつの子や、はだの色が黒い子、ひとみの色がちがう子など、いろいろいな子がいた。生まれた国

がちがう子が、いっぱいいたのだ。生まれた国がちがうということは、見た目のちがいだけでなく、言葉や文化、考え方も全然ちがう。けれど、ぼくはみんなと仲よくできて、分かり合うことができた。

ぼくが、最初に感じた友達とのきよりやかべは、自分の先入観が生み出したものだった。そのかべを打ちやぶるきっかけを作ってくれたのは、AさんとBさんだった。国せきがちがっても子どもは子ども、みんな同じ。自分からかべをつくらなければ、みんなと気持ちを分かり合えるということもぼくは学んだ。

これから先、きつとぼくはいろいろな人と出会うだろう。しように害のある人、ない人、苦手なことがある人、ない人。どんな人に対しても、自分からかべをつくらず、おたがいの気持ちを分かり合え

るようにしたい。

アメリカでの八カ月間は、ぼくに大切なことを教えてくれた。